

パスイ集成・斜里町立知床博物館篇

戸部千春

〒090 北見市錦町181-3 北見市立北光小学校

はじめに

小稿は、アイヌ民族の現存民具の実測図化による、形状と紋様の解析であり(注1)、斜里町立知床博物館所蔵の『捧酒箸』を対象とする。

金盛典夫編『所蔵資料目録-3(民族資料篇)』1983、掲載のデータを読み取ると、概資料17点は、次のように三区分でできそうである(注2)。

- ① 斜里地域アイヌ文化伝統社会で使用され、博物館開設の前後の時期に寄贈收藏された6本。
- ② 釧路地域アイヌ文化伝統を継承し、晩年には斜里町宇登呂地区で生活された志富イサネ(アイヌ名:イサネクル)エカシが、北海道内各地で収集し保管使用したもので、博物館に寄贈したアイヌ民族民具群に含まれる8本。
- ③ 志富エカシが、博物館開設に際して製作された『削りかけ捧酒箸/有翼酒箸』3本。

小稿では主に①について考察し、併せて②に就ても考察を試みるものである。

『捧酒箸』の機能・形状・紋様の研究は、先学による多くの業績がある(注3)。小稿はそれらの成果に依拠しつつ、斜里・網走・美幌のアイヌ

文化伝統を調査した米村喜男衛の報告を基礎に置いて資料の解析を試みた。氏は「この網走ではふだんはただ『パスイ(箸)』とだけ云っており、神に祈を捧げるときに限って、『イクニ(飲酒木・酒宴木)』『イクニブ(飲酒串・酒宴串)』というような特別の名でよぶのである」とも述べており(注4)、これはエンチュ(樺太アイヌ)による呼称の一つ『イクニシ』との類似も興味を持たれるものと、私は考えるがどうであろうか。

以下小稿は、当地日常呼称『パスイ』を用いる。

パスイの実測図作図は、パスイ使用者がそれを右手に持ち先端部を左方向に向けた状態の「左側面」を「正面」として描いた(図1)。展開図法は第三角法による。パスイの「正面」が製作者の思惟ではどの面であったかも、重要な問題であった。儀式の場では、カムイ/祭祀対象霊が人間の所作や器物を注目していると観念されていた事を想起しよう。すると、パスイの右側面こそが「正面」ではなかったか。しかし小稿では人間の視座で描き、それを右90°旋回して印刷する事としたのである。

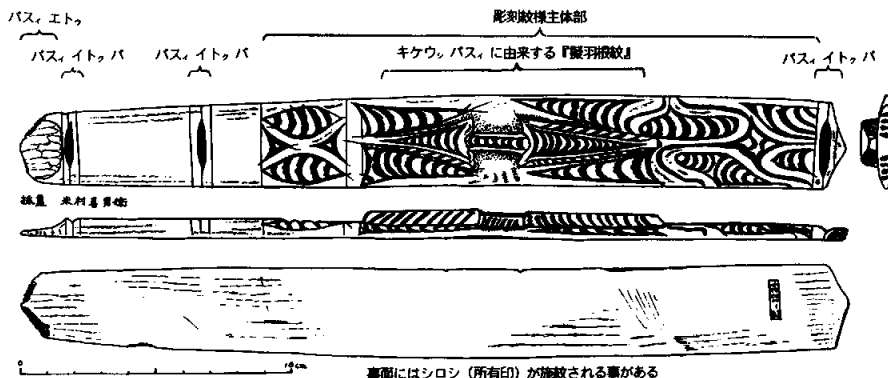


図1 パスイ概念図 網走市立郷土博物館蔵パスイ, 304×35×11mm (0-1-0)

資料1 (図3-1) 整理番号: 383

収蔵番号: 41 寸法: 326×37×6mm

バスイトクバ: 両切・1-2-1

バルンベ (口舌): 裏面

シロシ (所有印): 無

備考: 漆塗布, 基部紐穴

寄贈者: 斜里町・坂井男一郎

道東部バスイには珍しくバルンベが有る。同一意匠資料が美幌博物館に在り、今一つ杉山壽榮男『北の工芸～付ヒゲベラ』1934の52-9にも「出所日高下向」が在った事から、日高地方との遠隔地交流により美幌や斜里に伝搬したものであろう。新たに製作したバスイに漆塗布を依頼するにあたり、同一意匠品を複数製作した事例と判定する。

バスイトクバは一般的な両切舟窩紋1-2-1 typeが、先端部と末端部に配置されている。

中心的な紋様意匠は、器面中央部から末端部に位置し、現存するバスイの紋様配置の基本が守られている。この木の葉二枚を具象的に表現した紋様は、葉の先端をバスイの両端方向に向け、葉柄は交叉させて配飾されている。木の葉の具象紋でありながらも、アイヌ民族が製作使用したバスイの彫刻紋様を分析分類したF.マラーニ氏の研究で明らかにされたごとく、キケウシバスイ (削り掛け・有る・捧酒箸) のキケに由来するものだろう。当バスイでは「二翼型」を表現したものと、判断できる。起源が明確な紋様は伝統保持を示す。

この中心意匠を周回して、曲線状刻線紋がある。その先端部には、海洋上空主宰神を象徴するカピウシロシ (鷗印-図2 a~b) が付属する。この刻紋は、エンチュ (樺太アイヌ) の用いる重要な紋様の一つとして報告されてきたものであった。

これらを繋ぐ曲線状刻紋の中央部には、一個のシク (眼) 紋が置かれている事にも注目しよう。眼状紋や相対曲線が形成する三角形状/山形紋様等の先端部には、カピウシロシが付属する例が、マキリ鞘の紋様に少なくない。当バスイでも一括施紋されていると判断すべきであり、一定の様式に倣ったものと言えよう。

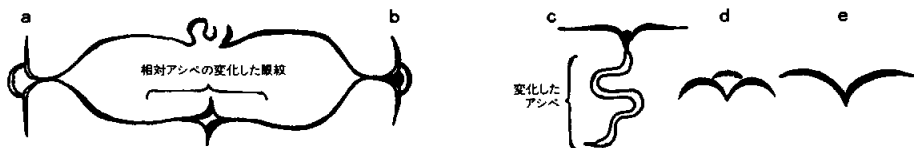


図2 カピウシロシ

資料2 (図3-2) 整理番号: 385

収蔵番号: 394 寸法: 327×30×9mm

バスイトクバ: 両切・1-1, 付属: 両切・1

バルンベ (口舌): 無

シロシ (所有印): 無

備考: 漆塗布, 中央部破断補修・末端部右側破損

寄贈者: 斜里町・村上清美

バスイ表面の彫刻紋様として小型バスイを表現し、結果として一本の材料から二段重ねのバスイを彫り出したもの。類例は少なからず存在し、杉山壽榮男『北の工芸～付ヒゲベラ』1934, 等に紹介されている。

黒と朱の漆で仕上げられた器面は、表面に就ては中央部で斜行する境界を設け前半分を黒、後半分を朱と塗り別けている。それをふまえながらも、①バスイエトゥの表面は朱色。②裏面も朱色とし、F.マラーニ氏が指摘した漆塗布バスイの塗り別け法則と合致しているのだった。

当バスイは中央部で破断されているが、裏面中央部にはほぼ菱形に穿って埋め木をはめ、更にバスイ本体に開けた小穴に通した細い針金で結束して、補修してある。アイヌ民族の思惟によれば、中央部破断によって「このバスイの生命は終焉した」と見做すべきであろう。しかしこれを「送る」ことをせず、「治療」して再使用に供した事は、使用者がこのバスイを愛着した深さを偲べるだろう。

バスイトクバは本体先端部に1-1, 二段目器体先端部に1。各々両切舟窩紋によっている。

バルンベは無く、道東部伝世類型に適っている。

彫刻紋意匠を構成するのは「爪型紋」と「アイウシ曲線紋」にほぼ二大別されるが、二段目先端部近くには、レブンカムイ (沖に住む神=鯨) のアシベ (鰭) も一個配置されており、注目しよう。本体先端部のバスイトクバに接し、カピウシロシが配される (図2 c)。二段目器体末端部にも二個配されており (図2 d・e)、斜里地域の「祖印」として重要である。

本体先端部のカピウシロシに連なる曲線刻紋は、マラーニ氏が明らかにしたレブンカムイイトクバの特殊な変容型だろう。二者の結合は興味深い。

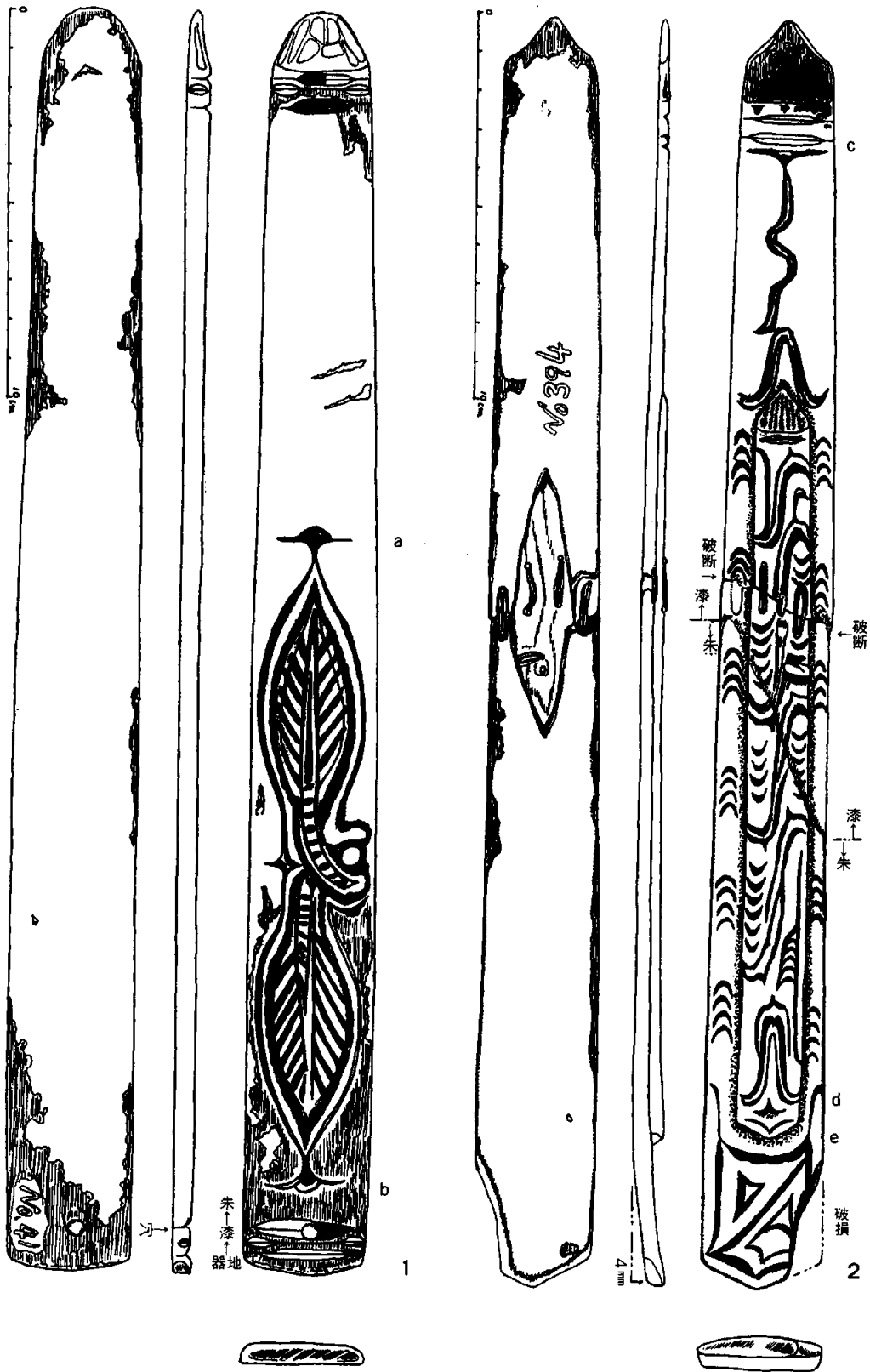


図3 パスイ 斜里町立知床博物館蔵

資料3 (図5-1) 整理番号: 384
 収蔵番号: 393 寸法: 347×40×7mm
 パスイトクバ: 両切・2-1-2-1
 パルンペ (口舌): 無
 シロシ (所有印): 裏面1個

備考:

寄贈者: 斜里町・村上清美

パスイトクバは先端部と末端部の、基準線となる切線が設定された上に、両切舟窩紋で2-1-2-1と配され、パスイの一典型を示している。

彫刻紋様は三ヶ所に区画されて施されている。前部方向には「右三ツ巴」、後部側は「五七桐」と和人文化の家紋を模写し、これらに依まれた個所には～それ故最も中心的な意匠である可能性が高いが～類日輪形象内部にカピウシロシの一変容形を刻む。或いはその前後も擬羽根紋との融合か。

明確なカピウシロシは、末端部のパスイトクバと接する位置にも施紋されており、重要である。

和人文化の家紋がアイヌ文化伝統社会に受容された経過は、シントコ (行器) 等の漆器を飾った紋様としてであったろうか。和製漆器は、アイヌ文化の展開過程で「美」と不可分の「靈力」の象徴として、交易や場所労働の代価に渴望されたのであった。漆器と和人家紋は繋がりを持って理解されたのであろう。当パスイでは、器体中央のカピウシロシ (図4 f) を刻んだ靈的威力が、漆器の靈力を誘い出す和人家紋によって一層扶揚される事を、期待されて、添付されたものではなかったか。

これら紋様の各々は、曲線による区画化紋様で囲まれているが、いずれの区画化紋様も斜行刻線紋や波状刻紋で内部を埋められており、「切線格子内鱗紋」が用いられていない事に留意しよう。

中央部の紋様部を囲む変化した三角形区画化紋は、多くのパスイに散見しうるもので、一定の意味が込められた紋様であったかもしれない。

裏面のシロシ (所有印) は、レブンカムイ (鱧) に由来する形象である。

当パスイは古色を帯び、歴年の使用を窺わせる。

資料4 (図5-2) 整理番号: 394
 収蔵番号: 1338 寸法: 330×28×14mm
 パスイトクバ: 無
 パルンペ (口舌): 無
 シロシ (所有印): 裏面1個

備考: 漆残存

寄贈者: 清里町・木下二葉

器面に塗布された漆は剥離が著しい。

パスイに刻まれるべき象徴刻紋であるパスイトクバは無いが、金田一京助『アイヌのイトクバの問題』1930で述べられたように、彫刻紋施紋の行為によって、その欠は補われたと見做すべきだろう。付言すれば、器面の五ヶ所を横切る『擬桜樹皮絞め付け帯』紋様が、パスイ上のパスイトクバが置かれる個所で置換されている例が散見される。パスイトクバとは何であったのか。この問題を解明するうえでの、hintになるとと思われる。ここで表現された擬桜樹皮絞め付け帯紋は、5本の切線を切り、2本目と4本目の内側をやや削る事で、『蝦夷太刀』やマキリ鞘に巻いたカリバ (桜樹皮) を模している。紐縄が器物の損壊を防ぐ力を持つと同じく、カリバにも同じ威力を認め呪力を期待したものであろう。

パスイと太刀型状や紋様との関わりは浅からぬものがあり、杉山壽榮男著作で実証されてきた。当パスイも又、太刀鞘意匠による事は明らかである。浮き彫りされた『木の葉状紋』は、太刀を飾った目釘覇金具等を模したと考えられる。と同時に、これらは総体として四翼型のキケウシパスイとの相似さえも窺えるのではあるまいか。斜里地域に隣接する網走地域アイヌ文化伝統では、キケウシパスイが製作使用されていた事が報告されており、釧路地域アイヌ文化伝統を色濃く保持した美幌地域ではそれを製作していなかった事と併せて違いが明瞭であった。永続使用されるパスイの紋様にも、文化の相異点が表現されたものか。先端部と末端部に、カピウシロシが刻まれる。裏面のシロシは、相対アシペを表現している。



図4 カピウシロシ

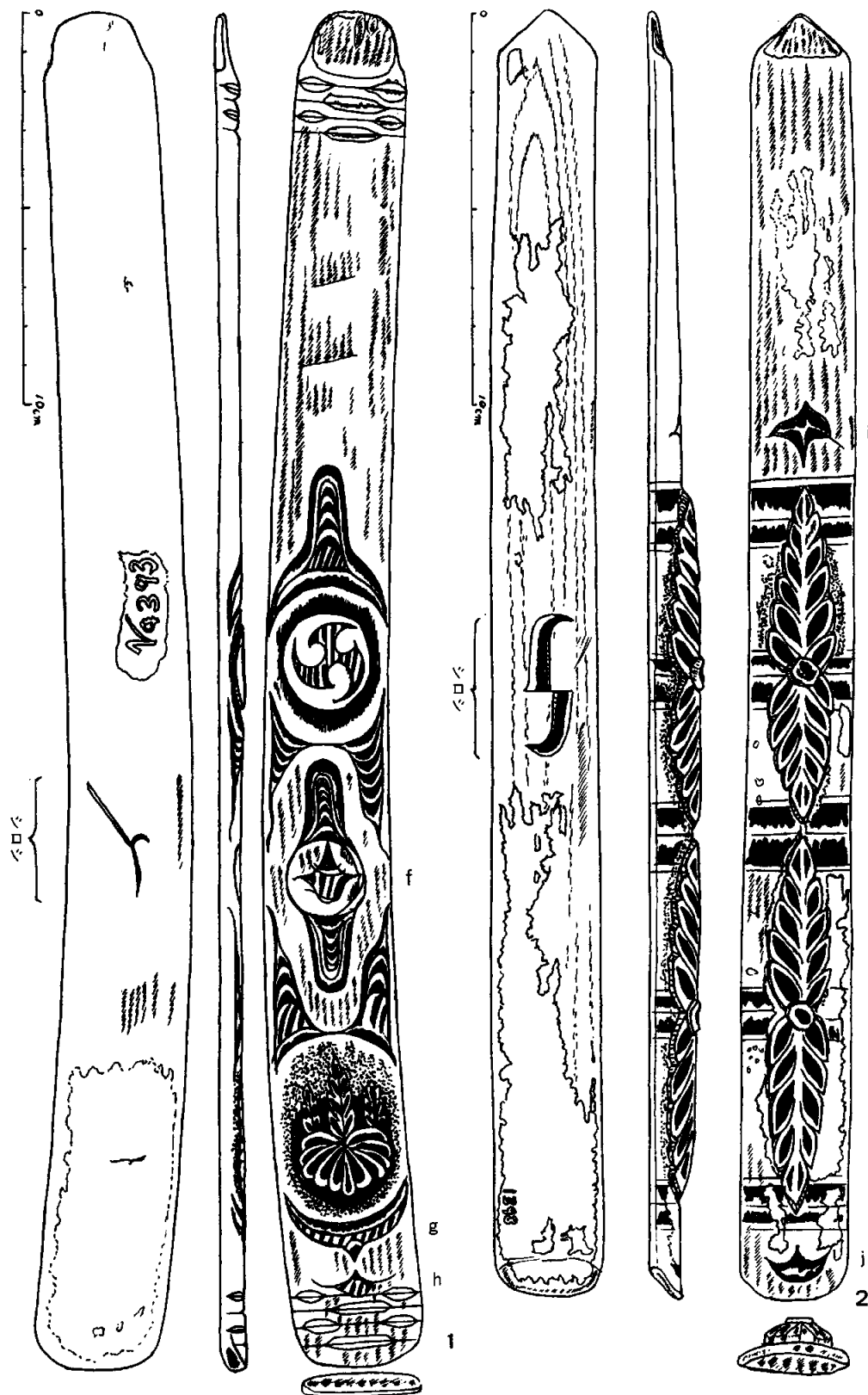


図5 バスイ 斜里町立知床博物館蔵

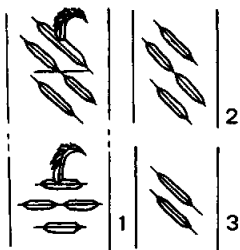
資料5 (図8-1) 整理番号：395
 収蔵番号：1399 寸法：306×26×16mm
 パスイトクパ：両切・1-2-1
 パルンベ (口舌)：無
 シロシ (所有印)：裏面1個
 備考：採集地・斜里
 寄贈者：清里町・木下二葉

斜里で使用されていた事が明らかな6本のパスイ中、最も小型のパスイである。他とは異なる使用意図によって、製作されたものであろうか。そう考えると、簡素な彫刻紋も何らかの関連があったように思える。美幌地域アイヌ文化伝統の祖靈祭では、男性用と老女用の各レタルパスイ(白い・棒酒箸)が用いられると語られており(注5)、レタルの意を〔彫刻紋が最小限の白木に近い〕、更には〔聖性を有した〕と解釈する事で、本パスイが、それに概当する可能性を高めるだろう。小型であるのは、老女用として製作された為である。

器面中央部の、斜行切線上の1-2-1typeのイトクパは、北見市・北方歴史美術館収蔵パスイとの比較によって、レブンカムイイトクパと解釈する。馬場・姫野論文が、斜行する1-1typeを同じく分類していた事も重要である(注6)。

このイトクパの施紋によって、斜里そして斜里と繋がる美幌では、祖先神が海洋を主宰するレブンカムイ=鯨と深く関わる一族がある事が明らかになった。

裏面シロシもレブンカムイシロシの特殊な変容型とされるものであった。



1・4 北方歴史美術館蔵
 2 知床博物館蔵
 3 馬場脩著作集成図より

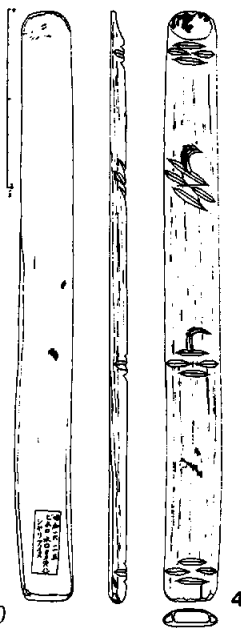


図6 レタルパスイ上のレブンカムイイトクパ

資料6 (図8-2) 整理番号：396
 収蔵番号：1400 寸法：332×36×17mm
 パスイトクパ：両切・1-2-1
 パルンベ (口舌)：無
 シロシ (所有印)：無
 備考：採集地・斜里
 寄贈者：清里町・木下二葉

熊の頭部と、その手前に置かれた膳を模した高彫りが、一括されて二組配飾されている。キムンカムイ(山住みの神霊=熊)の「霊送り」儀礼を再現したものであり、米村喜男衛『北見アイヌ人』1937で分類された、カムイパスイに概当するものであろう。二個の膳の中央部には、本来トゥキ(杯)やタカサラ(高皿)も高彫りされていたものかもしれない。

熊頭部の鼻面には、一本の切線が横断している。霊送りされる熊は、現世に来訪した際の衣装=毛皮を脱がされて、霊本来の姿に復されて本来の世界へと帰還できると観念されていた。しかし鼻面部分だけは毛皮を残すのだった。一本の切線は、それを表現したものにちがいない。

高彫り頭部基部の器面には、曲線でx字状のキムンカムイイトクパが配される。剃がされて折り畳まれた毛皮が安置されている事を表現したに違はなく、x状刻紋の起源が示されたのだった。

パスイの中心軸上に、三ヶ所の透し彫りが穿たれている。この意匠のパスイは「格が高い」と評価されるが、「カムイパスイ」にふさわしいだろう。

三ヶ所の透し彫りが全て繋がると仮定すれば、パスイが2枝に割れた形状になる。杉山壽榮男が究明した古型式パスイとの相似が明らかになるだろう。和人社会古墳文化期の箸の形状が、アイヌ文化伝統の匙状一本パスイへと変化していく際の、移行期の形状を保存しているものと評価しよう。

先端部にはカピウシロシ(図7)が他の紋様群に連結しつつ明確な形象で刻紋される。斜里の特徴を表明した、古式を伝える雄渾な一品であった。

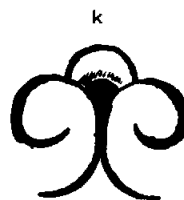


図7 カピウシロシ

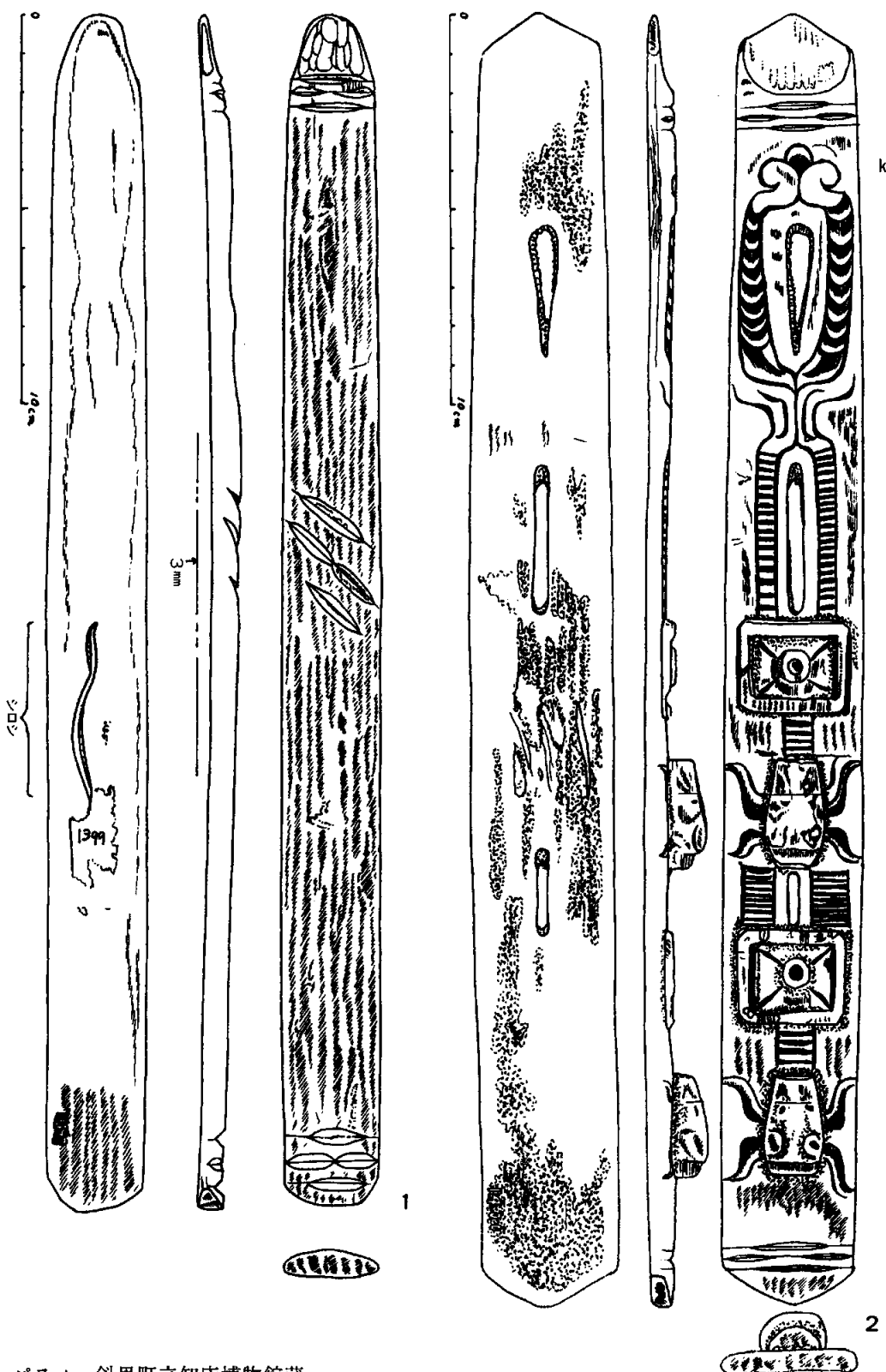


図8 パスイ 斜里町立知床博物館蔵

漆塗布捧酒箸及び口舌刻紋の有無について

斜里地域使用が明らかな6本のバスイを観察する事で、アイヌ民族が製作し使用した「捧酒箸」としての共通性保持の確認ができた。それと共に、彫刻紋様の地域の特徴が明らかになったと言える。共通性としては、その型状・寸法のみならず、F. マライーニ氏が明らかにした、漆塗布の彩色原則が、斜里の資料でも堅持されていた点の確認ができた事を重視しておきたい。即ち、

- ①裏面は朱漆の彩色塗布とされる。
- ②表面先端部、いわゆるバスイエトゥ（捧酒箸・鼻）の表面湾曲内面部分も、朱漆の塗布とする。これであった。バスイを漆塗布とする創意は、杉山壽榮男によれば「幕末に始まる。」、萱野茂によれば「明治以降」と説明されてきた。

いずれにしても近世から近代にかけての転換期の創意であったと考えられているのだった。漆塗布を希求した背景には、祭祀具に寄せる「漆器靈力信仰」とも呼ぶうる思惟があったと考えてよいだろう（注7）。それ故だろうか、現存する漆塗布バスイを「めずらしい」と評価する見方もある（注8）。しかし私は、龐大な現存する伝世バスイの中であって「割合が少ない」と理解するに留めたい。

漆塗布バスイ創意の時期こそ、アイヌ文化伝統が「近代化」の圧力の中で変容を迫られた時代であり、創出間も無いこの塗布原則も、急速に破られたものが生み出されていったのである（注9）。

塗布原則が堅持された斜里の例は、近代前・中期に製作された確度が高い、と私は推定しよう。

先端部に配される例がある口舌刻紋（バルンベ・サンベ）は、6点中唯1点であった。口舌刻紋の有無について河野広道の先駆的研究は有から無へと歴史的な解釈を示していた（注10）。しかしその後、名取武光がキケウシバスイ（有翼酒箸）の施紋例を詳細に検討した結果、地域差の指摘と共に無から有への変容過程を提承している（注11）。文化伝統がより保守的な道東部では、口舌刻紋が無かったという指摘は、斜里に現存する6点中5点に口舌刻紋が無い事実を、良く説明すると言えるだろう。唯一の施紋例は漆塗布例でもあり、近代以降の地域間交流の結果紹来されたバスイであったと解釈できる。私は日高からの伝搬と解した。

カピウシロシ施紋の確認について

チカブシロシ（鳥・印）は、鳥形の姿を借りて顕現していると観念されるカムイ（神霊）の印で、地域によって狩猟神の代表とされる場合があった（注12）。エンチュウ社会においては、飛翔した姿を模して印とされる場合が多いようである。とりわけ、海洋の上空を領域とする天空神の代表とされるカピウ（鷗）の印が少なくなく、馬場脩によってイクニシ（捧酒捧）の研究と共に集成化がされている（注13）。この研究成果を受けて名取武光は、浜益のキケウシバスイ刻紋に注目し「チカップノカは樺太と共通し」と説いた（注14）。

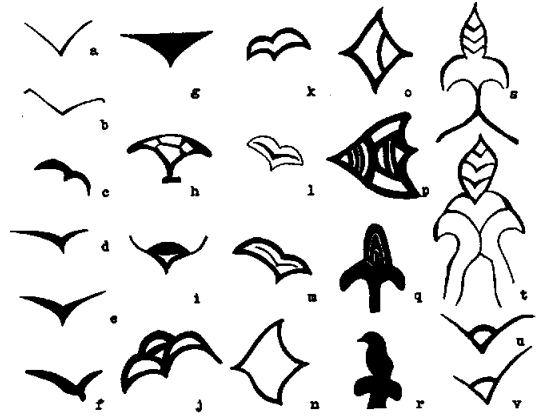


図9 馬場脩『Iku-Nishi of the Saghalien Ainu』で集成された「チカップノカ」

馬場集成図中の“S”と“t”は独立した「チカップノカ」と判定されている。しかし私は、海洋神形象刻紋の上部に萌芽し分離を準備中の海洋上空神形象刻紋との、二者一体形象の段階と解釈したい。図10に私案を示した『レブンカムイイトクバからカピウシロシが分離する過程』を参照されたい。

飛翔する鳥形を模した紋様であるカピウシロシ・チカップノカをエンチュウに特徴的な紋様であると理解するならば、北海道のオホーツク海沿岸の斜里地域と、日本海沿岸の浜益地域とは、共にエンチュウ文化と共通する要素があったと判断すべきだろう。かつてアイヌ文化伝統の墓標型式を分類した河野広道は、斜里峰浜の男性墓標をエンチュウ様式としていた（注15）。同様に、日本海側もより南下して余市までも西エンチュウの文化伝統を継ぐ地域としていた事も想起したい。

但し、現存する多数のバスイを観察すると、斜里伝世品と同じ場所に、この刻紋が施紋されている例を確認できる事実にも、留意する必要がある。

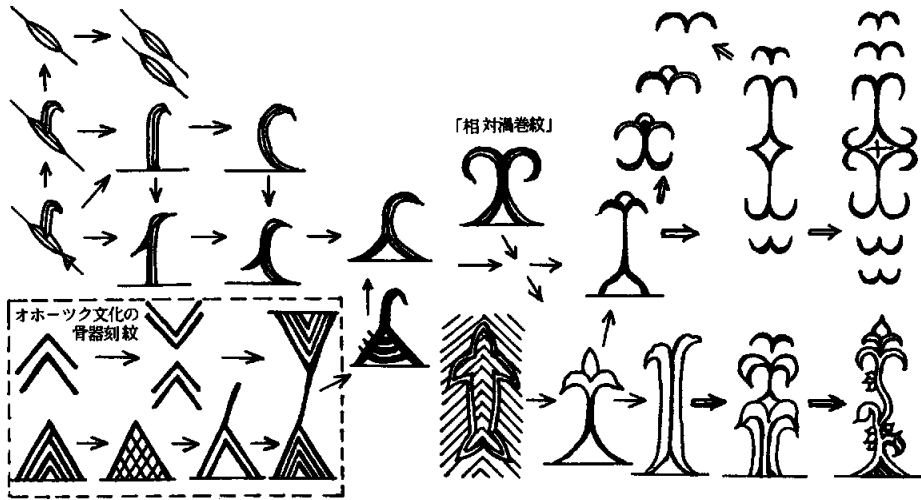


図10 レブカムイトッパからシロシが分離する課程

「海洋神」の象徴刻紋は、続縄文文化やオホーツク文化の骨角器刻紋からの伝統を継承しつつ、アムール地方を中心とする古い「相對渦卷紋」形象を重複化し、やがて「海洋上空神」の象徴刻紋のカピウシロシを分離する。

衣服や服飾品まで範囲を拡げて検当すると、北海道内各地のマタンブシの刺繍紋様にも注目したい。翻り、エンチュ魚皮切伏せの形状も重要だろう。

即ち私は、北海道のオホーツク海沿岸部では、斜里に加えて網走・常呂・湧別・紋別等のアイヌ文化伝統には、エンチュ文化と共通する要素が比較的濃厚に残ったと考える。1858（安政5）年に松浦武四郎は、常呂川中流域でトンコリ（五弦琴）の所在を確認していた事も想起しよう（注16）。とすれば、かつてバチェラーが紹介した以下の証言も重要ではあるまいか（注17）。

「或るアイヌ人の語るところに依ると、網走はカラフトマアイヌの交易上の上陸地であったところから斯く名付けられたものであると。」 信憑性が高い伝承として以後検討すべきと考える。

キテ（回転式離頭鉞）への刻紋について

斜里地域アイヌ文化伝統の現存民具の内、キテ（回転式離頭鉞）にも、この刻印が施されていた。その伝承者K.H.氏はこう述べている（注18）。「(略)キテの上面中央にはキテイトッパがあり、これはエカシイトッパでもある。」(図11)。

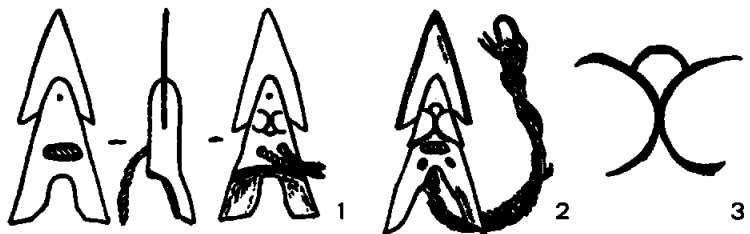


図11 斜里アイヌのキテ 3 斜里地域アイヌ文化伝統のキテイトッパ

狩猟具に施紋する意義に就ては「誰が仕止めたものか判定するため」と萱野茂の報がある（注19）。

私は、ピウスッキが報じたエンチュの祈祀の例が、斜里の刻紋例を理解する上で重要と思う（注20）。アイシロシ（矢・刻紋）を更新することで、旧い刻印を経年使用した事で狩猟能力が低下した矢の霊力低下を活性化させる。更新行為を祈詞で述べて、獲物の増加を祈願するものであった。

アイとキテでは、狩猟対象霊に山野住と海洋住の違いがあるが、人間との関わりは共通するだろう。儀礼を支える思惟も共通したのではないか。

今後の課題

私は現存する民具から、斜里地域アイヌ文化伝統の要素を考察してみた。しかし当地の近世貝塚遺物の骨角器刻印はより多様であり、その綿密な集成化と意味の追求こそが、今後の課題である。

1 「民族調査報告書Ⅲ」より改写

2 「所蔵資料目録-3」より改写

3 斜里地域アイヌ文化伝統のキテイトッパ

資料7 (図13-1) 整理番号: 386
 収蔵番号: 1147 寸法: 368×38×30mm
 パスイトクバ: 両切・1-2-1 & 特殊
 パルンベ (口舌): 無
 シロシ (所有印): 裏面1個
 備考: 収集地・日高地方/志富イサネ収集品
 寄贈者: 斜里町・志富イサネ

バスイの標準的寸法よりもやや長大に製作されている事は、製作し使用した男性が、特別な思い入れを持っていた可能性も推定させずにおかない。

選ばれた木が軟らかい性質であったのだろうか、経年変化は、古色を帯びる方向とは逆に表面の著しいボケとして進んでいるし、三ヶ所の高彫り部分は全て大破してもいる。表面に2mm²程の朱色塗料が、二ヶ所残存している事で、かつて全体が漆もしくは類似する塗料で覆われていた事が判る。

器面の地紋は「切線格子内鱗紋」であり、近代以降の製作と限定できるが、切線の配置が乱れており、技術の未熟もしくは衰退を示す。塗料の極端な剥離と併せて考察すると、材料選択と彫刻技術の後退した近代後・末期の製作ではあるまいか。

破損した高彫りは、類似するバスイ意匠から推して、バスイ先端部から順に「膳上の高杯」・「安置された熊の頭部」・「刀剣鞘の栗形部分」であったろう。即ち、バスイ全体は刀剣形象を模しつつ、中心意匠は熊の霊送りの場面を再現する、複合意匠品なのであった。「膳上の高杯」前方の無紋帯も、刀剣鞘の絞め付け金具を意識したものであったろうか。このような彫刻紋様の所在が明らかになると、当バスイが長大に製作されたのは、日常の儀礼とは別の、キムンカムイ (熊) へのカムイノミ専用品として企画された可能性が高いのではあるまいか。特殊イトクバも、基本型にキムンカムイイトクバを複合加刻したものに見える。

自然界の二領域、海洋と山岳を主宰する二大神であるレブンカムイとキムンカムイを祭祀するには、各々専用バスイが準備されていた。レブンカムイ用バスイには刀剣意匠が選ばれる傾向があったようである。彫刻される太刀鞘の絞め付け金具形象がレブンカムイイトクバの一 variation に酷似するものがあるのは、海洋神と太刀との歴史的起縁の存在すら想わせる。両者結合意匠の海洋神要素が、自然界の今一つの重神である山岳神に置換されたもの。それが当バスイの属す一群だった。

資料8 (図13-2) 整理番号: 387
 収蔵番号: 1148 寸法: 328×33×15mm
 パスイトクバ: (半切/両切) 3-3-3-3
 パルンベ (口舌): 無
 シロシ (所有印): 無
 備考: 収集地・日高地方/志富イサネ収集品
 寄贈者: 斜里町・志富イサネ

バスイイトクバがめずらしい。先端部と末端部では、三列目の舟窩刻紋数が異なっているし、各部分の「両切」と「半切」の違いにも、或いは製作者の意図するものがあったのかもしれない。

彫刻紋様は、五つに区画化された前方四区画に施される。最先端部にはマキリ鞘で多用される「擬縄絞め付け帯」も加わり、興味深い。バスイ上の紋様主体部は末端部側とするのが通則であるが、第五区画を無紋とした事で、先端部側が重点化された事も、製作意図とは別に異例な結果となった。

第一・二区画はアイウシ曲線と、弧状刻線紋。周囲の三角形の紋様はバスイ刻紋に例が多い。何らかの意味~或いは、海洋神山形刻紋の変形か。

第三区画は、左上から右下に斜行無紋帯が置かれ、その外側に方向を異にする「青海波紋」が飾られる。これらの意匠は、他のバスイに度々確認できるものであり、私はその起源を「斜行相對鱗紋」に求めるべきと考えている (図12)。

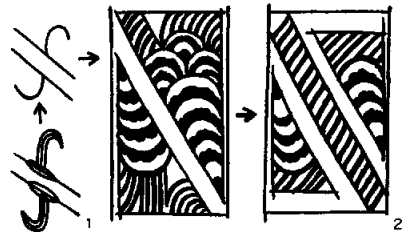


図12 斜行相對アシベと青海波紋

1 斜行相對アシベ

2 『青海波』意匠を導入し融合した紋様

この種の変化は、精密な彫刻技法に支えられてS字状紋へと移行した過程を、F. マライーニ著作が克明に実証していた。当バスイの例は、彫刻技法の衰退に伴う、紋様の変化した姿であろう。

第四区画は、二本のアイウシ曲線の区画内部をやや削平した中に『斜行刻線紋』を配す。斜行刻線紋は、近世アイヌ文化成立以前からの伝統を継ぐものであり、近代後・末期の製作であろう当バスイに堅持された、伝統の根幹を見る思いがする。

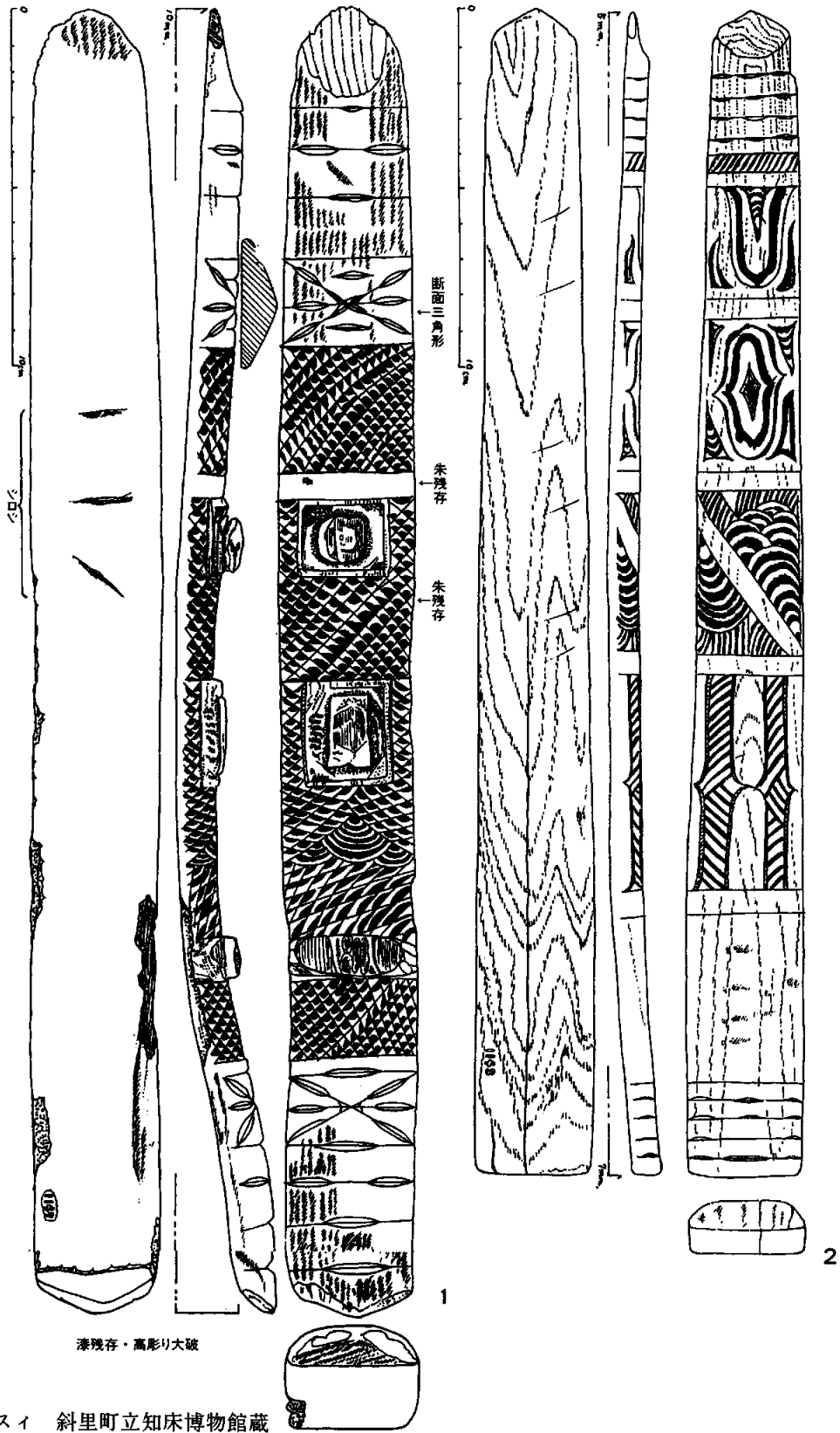


図13 バスイ 斜里町立知床博物館蔵

資料9 (図15-1) 整理番号: 389
 収蔵番号: 1150 寸法: 230×22×7mm
 パスイトクバ: 半切・3-3-3
 パルンペ (口舌): 裏面
 シロシ (所有印): 裏面1個
 備考: 収集地・日高地方/志富イサネ収集品
 寄贈者: 斜里町・志富イサネ

パスイの標準寸法約30cmと比して、80%程の小型品である。杉山壽榮男「北の工芸～付ヒゲペラ」1934、では、一型式と認定して分類されていた。

パスイトクバは先端部では半切舟窩紋も用いられて細やかである。パスイの基本要素ではあるが、このような例に接すると、発掘資料骨角器の刻紋との関わりも検討する必要を感じさせられる。

斜行格子状刻紋の帯を起線として、レブンカムイトクバの一変様型が配されるが、製作者＝使用者のエカシトクバ (祖印) であった。

紋様主体部は交互に配された連続弧状刻紋であるが、私はこの種の紋様を『擬羽根紋』と呼ぶ。キケウシパスイ (有翼酒箸) のキケ/ラブ (翼) を模した紋様とするF.マラーニ著作の説により、当資料では「四翼型有翼酒箸」起源の彫刻紋様と考える。私が『擬羽根紋』と呼ぶ故縁であった。

これを周回するのは、縄を模した『擬縄紋』である。衣装の刺繍技法である撚り紐を縫い付けたイカラリ (駒縫い) と同じ思惟が、ここに反映していると考えられるのではあるまいか。

しかし、この擬縄紋の末端部は水滴状にふくらませており、そこを含めnegativeな紋様と見る時、その周辺があたかも刀剣鞘の金具を意識して彫り残されている事にも思い至るであろう。

日高地方使用でありながら『切線格子内鱗紋』を用いない事は、「祖型」を残す意図故だろうか。



図14
 モヨロ貝塚発掘の骨器
 大場「モヨロ貝塚の骨
 角器」より

資料10 (図15-2) 整理番号: 391
 収蔵番号: 2472 寸法: 325×25×6mm
 パスイトクバ: 両切・0-1-0-1
 パルンペ (口舌): 無
 シロシ (所有印): label上に焼印1個
 備考: 製作地・旭川/志富イサネ収集品/末部紐穴
 寄贈者: 斜里町・志富イサネ

製作地・旭川と情報が明らかな優品。志富イサネ夫人シズ嬢が、旭川近文出身であった事から、志富家へ移譲されたのだろうか。裏面にはlabelが貼られ、その上から「富」の焼印が押捺される。アイヌ文化伝統のシロシ (所有印) の系譜上に理解すべきだろう。倒立した富字は、基部小穴に紐を通し吊り下げて保管した状態で、正立視できるよう意図したのだろうか。同様に小穴を穿たれた2本と共に、志富エカシの愛用を偲びたい。

パルンペ (口舌) が無い事は、古型式パスイの特徴が継承されたものであったろうか。

0-1-0-1と配されたパスイトクバに隣接し、斜行切線上に1-0と刻む舟窩紋はレブンカムイトクバの一変容に違いない。切線と舟窩紋との組み合わせは、パスイトクバの配置と共通しており、製作者男系を特徴付ける刻紋であったろうか。紋様主体部先端には、エカシトクバ (祖印) が配されるが、レブンカムイトクバの変容形でありながら、カピウシロシとの形象分離が準備されている事に注目しよう。

紋様主体部は4ヶ所の杏仁紋を区画化し、中央部を楕円型に彫り残して、やや削平した内部に連続弧状刻紋を配す。類『擬羽根紋』ながらも当パスイでは、オホーツク文化骨器上の山形刻紋が象徴する海洋神形象の伝統紋と解析できた。先端突起と併に、波を立て海上を進むカムイの姿である。基線を対称軸に相対配置し、全体を杏仁様に曲線変化させたが、アシベ (鱭) 突起も杏仁紋様相互を連結する刻紋として、結合しているのだった。

各杏仁紋の内部に置かれた楕円型部分は、高彫り風にされた事で、印象を強める効果を生み出している。これらは、アイヌ文化伝統社会で希求された古型式刀剣の飾り金具を模したものであろう。金属によせる強烈な霊呪力信仰は、パスイの彫刻意匠にも絶大な影響を及ぼしている事が杉山著作で指摘されているが、当パスイにもその思惟が反映しているのだった。

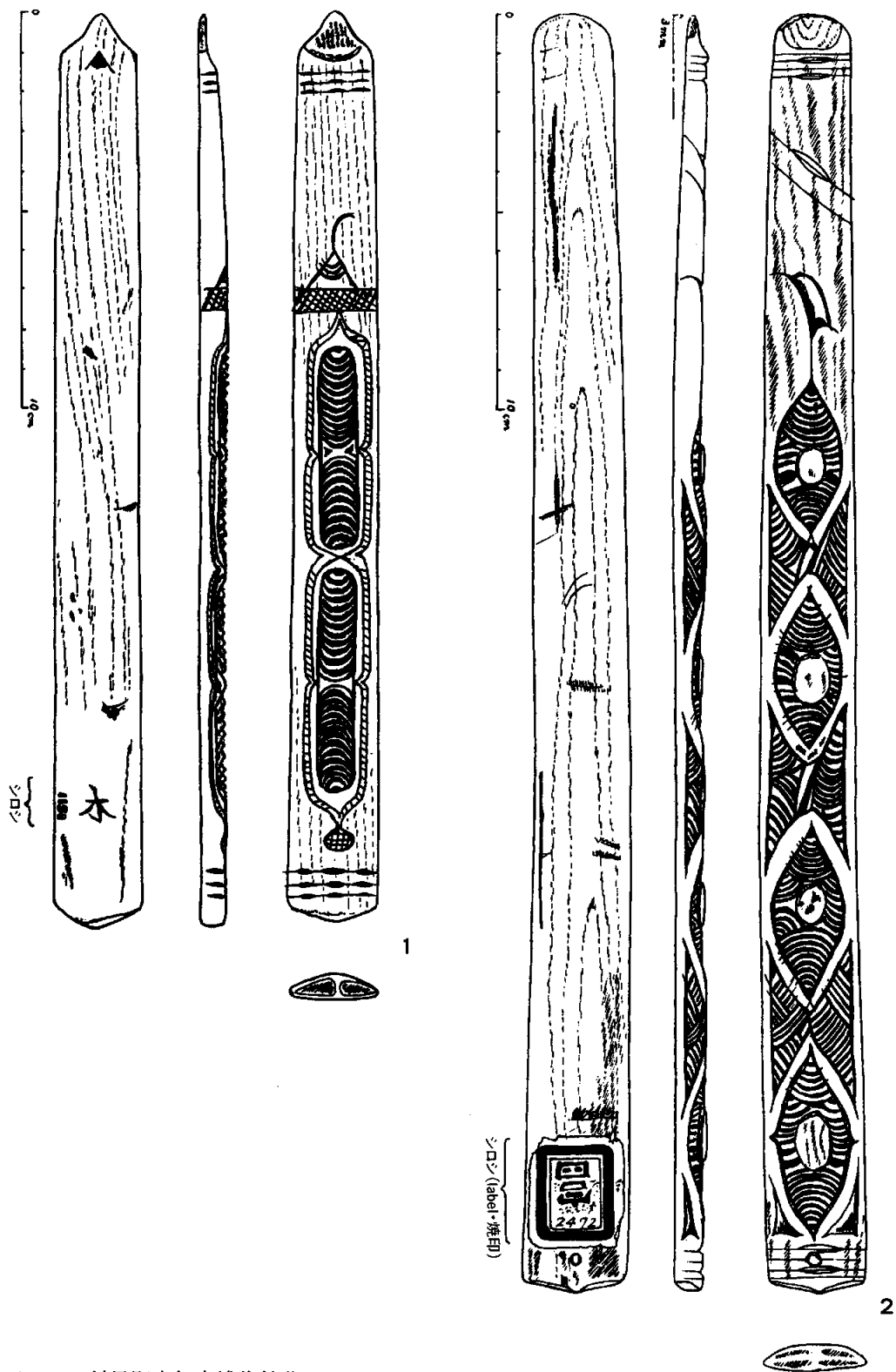


図15 パスイ 斜里町立知床博物館蔵

資料11 (図17-1) 整理番号：388
 収蔵番号：1149 寸法：330×29×8mm
 パスイイトクバ：無
 パルンペ (口舌)：無
 シロシ (所有印)：無
 備考：『類バスイ漆器』，剝離進行

収集地・日高地方／志富イサネ収集品

寄贈者：斜里町・志富イサネ

彫刻紋様が一切無く、彩色描画紋様だけで飾られるものなので、『類バスイ漆器』と呼称分類しておく。この種の漆器は、アイヌ社会の需要に応じて近代以降に企画製作された『和製品』と解釈されてきた。既に1942 (昭和17) 年刊行の F. マライーニ氏著作に紹介されており、それに先だって製作・使用されていた事が明らかである。しかも同書に紹介された資料 (図16) は、写真判定では、漆塗布は1-1-1 type パスイイトクバ施紋の後である。その type は、沙流川を中心活動域とする集団、即ちサルウンクルのバスイに多い種類であった。

私は、この『類バスイ漆器』は、近代末期に北海道内の特定地域で、バスイイトクバをあえて刻むことなく大量に製作され、各地に供給されたものであったかもしれないと推定しているかどうか。

かつて交易で入手した漆器を希求するアイヌ民族の思维は、近代以降も継承されて、この種のバスイを受容したと考えられるだろう。

紋様は他に蓮華紋と三ツ巴紋が配されるが、杉山壽榮男『アイヌ文様』1926で集成化された巴紋が重要である。寛政元年の1789年に松前から有珠までの紀行を記録した菅江真澄『えみしのへさき』には、当時既にこの種の紋様が概地のアイヌ社会で愛用され、和入小山悪四郎の家紋を継承するものと理解されていた風俗を伝えてもいた。異文化の接触・受容・継承の実際は興味が尽きない。

資料12 (図17-2) 整理番号：390
 収蔵番号：1151 寸法：330×34×7mm
 パスイイトクバ：無
 パルンペ (口舌)：無
 シロシ (所有印)：無
 備考：『類バスイ漆器』，剝離進行

収集地・日高地方／志富イサネ収集品

寄贈者：斜里町・志富イサネ

『類バスイ漆器』として製作された1本。彫刻紋様は無い。やや幅広で、描画紋様が簡素な事と併わせて、大味な印象が感じられる。両端部に近くなる程に、穏やかに幅を絞り込む形状は、バスイの一般的形状とは異なるものである。

器面は黒の地塗りの上に金茶色で「木の葉紋」を散らし、更に中心意匠として、先端部側には和人家紋の『三ツ柏』、末端部側には朱色で魚を描いている。後者は、和入文化の吉祥紋様としての『鯛』であったろうか。

こうした意匠は、和入文化要素の受容度の大きさを示すものではある。しかし『鯛』を正立状に見る事ができるのは、これを右手に持つ使用者ではない点に留意しよう。祭祀対象神の視座を考慮した描画になっているのは、大変興味深い。

破損の進行は、製作法に起因するものだろうか。

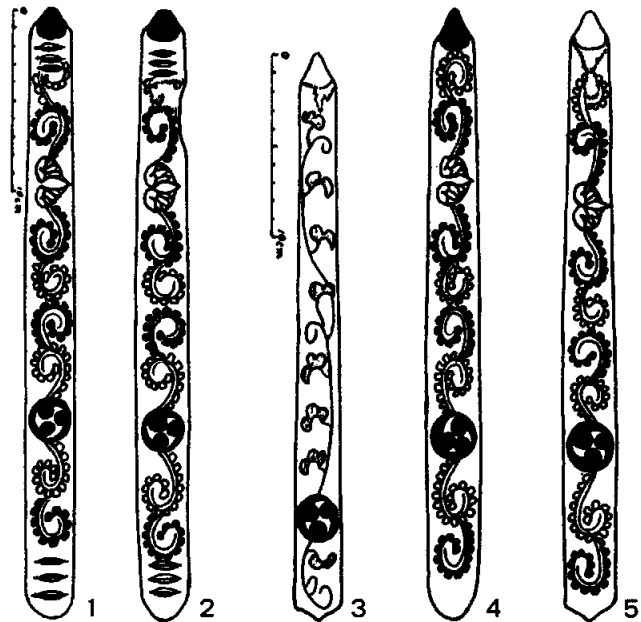


図16 『類バスイ漆器』 1. 2 マライーニ著作より
 3～5 河野本道編著より改写

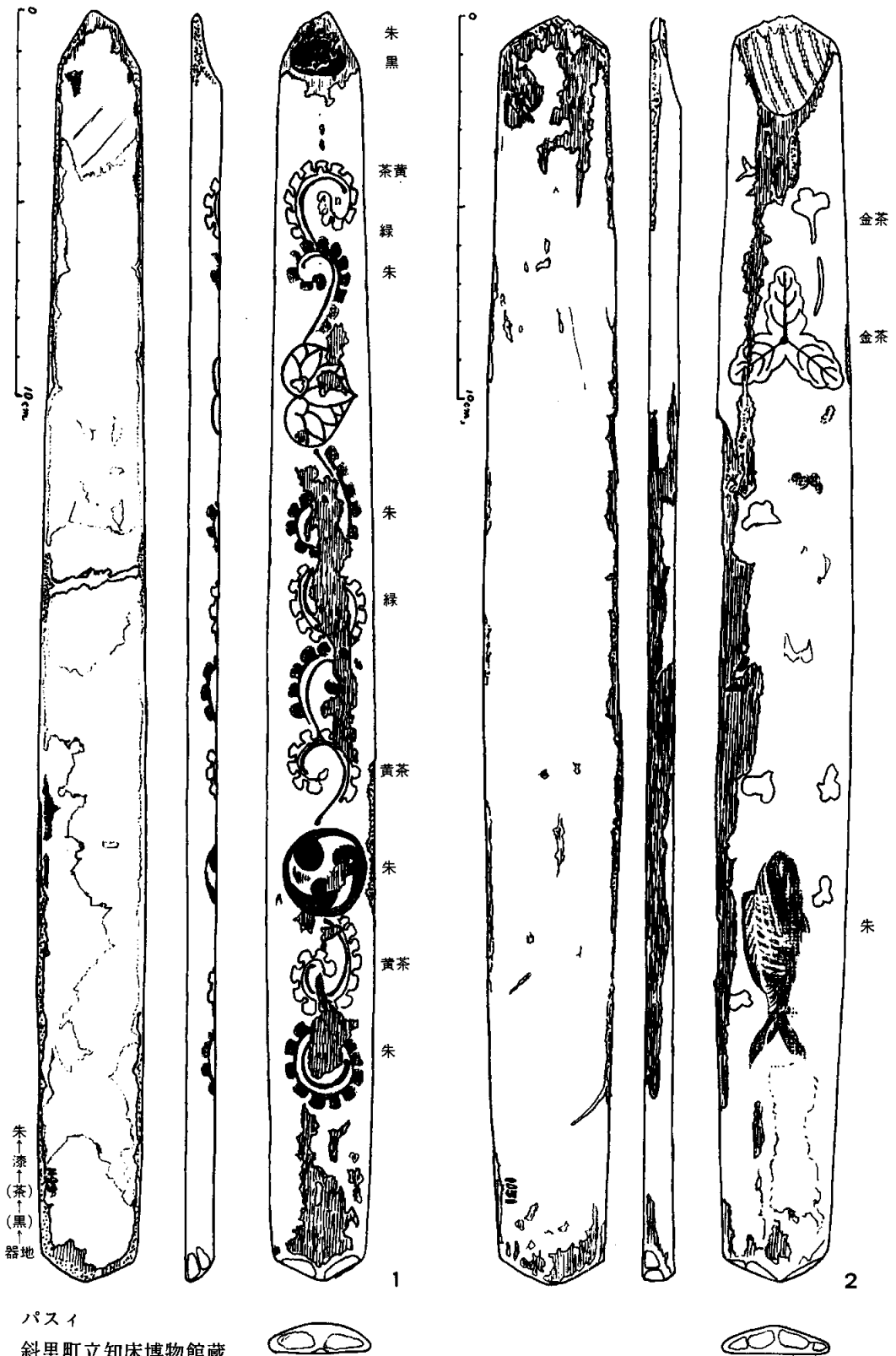


図17 パスイ

斜里町立知床博物館蔵

資料13 (図19-1) 整理番号： 392
 収蔵銀号：2544 寸法： 333×34× 8mm
 パスイトクバ：無
 バルンベ (口舌)：裏面
 シロシ (所有印)：label 2種(?), 焼印1種
 備考：主体部墨塗布
 寄贈者：斜里町・志富イサネ

知床博物館に収蔵される故志富イサネ収集パスイ8本の内では最も新しいtypeである。私は現代に製作されたパスイであろうと、推定しておく。

裏面には、丸に「富」字の焼印が倒立状態で押擦されシロシ (所有印) とされている。末端の小穴所在も共通する整理番号391資料と共に、志富エカシの使用品であったと思われる。小穴を利用して、パスイ先端方向を下に向け吊り下げて保管したものであったろう。2種類の labels の1枚には「志富」の記入があり、これもエカシ本人による所有印と解し、アイヌ文化伝統のシロシ形象の現代の変容型に位置付けて理解すべきと考える。

パスイトクバは配されない。しかし彫刻紋様を加える事で、製作者による霊力付与が完了してパスイとしての機能が生じるとする金田一京助論文が重要である。外型の整形は甘さも認められるが、パスイとしての条件は満たしているのだった。

器面の紋様主体部は墨が塗られ、漆塗布パスイの意匠を模す。この主体部は更に、隣接平行切線による帯が3本横断しているが、帯内の切線の存在から推して、桜樹皮を幾重にも巻き付けた紋め付け帯を擬した紋様であろう。桜樹皮紋め付け帯は、いわゆる『蝦夷太刀』鞘に多様される技法であるが、この観点で当パスイ紋様を検討すると、『切線格子内鱗紋』で飾られる4区画が、あたかも蝦夷太刀鞘に象眼装飾される骨角製の長方形の彫刻飾り部品のように配置されていると思われるのだった。即ち当パスイにも、『太刀』に寄せるアイヌ民族の伝統的思惟が反映していたのである。

「切線格子内鱗紋」はやや大振りであるが、ひじょうに美しい。私は、志富エカシが製作し「杉村キナラブック受賞記念」と彫られた木製アイヌ民族マキリ鞘を想起する。『開拓記念館展示図録』1981年掲載写真でもその特徴が判るが、桜樹皮紋め付け帯を特徴とする志富エカシの作風は、当パスイの製作者をも示唆するものではないだろうか。

資料14 (図19-2) 整理番号： 393
 収蔵番号：2545 寸法： 355×31×10mm
 パスイトクバ：両切・1-2-1
 バルンベ (口舌)：無
 シロシ (所有印)：裏面1個
 備考：基部紐穴
 寄贈者：斜里町・志富イサネ

やや長大な 355mmの器面に4ヶ所、1-2-1 type のパスイトクバが置かれ、器面が3ヶ所に区画される。各区画は、先端区は「擬桜樹皮紋め付け帯」によって前後に二分され、第2第3区画は「無紋帯」によってやはり二分されている。第2区画の「擬羽根紋」と刺付き渦巻き紋とされたアシベの「レブンカムイトクバ」を除いては、一見して様々な幾何学紋の無秩序な collage という印象が強い。しかし各構成紋様要素のいずれも、相対曲線が形成する三角形であり、本稿第10図で示したレブンカムイトクバ variations の一形状を、明確に表現した刻紋も配置されている。

このように基線から立ち上がる三角形意匠等を collage 的に複数配置する例として、従来オホーツク文化の骨角器＝『針入れ』(図18)と判定されてきたものを指摘しておく。

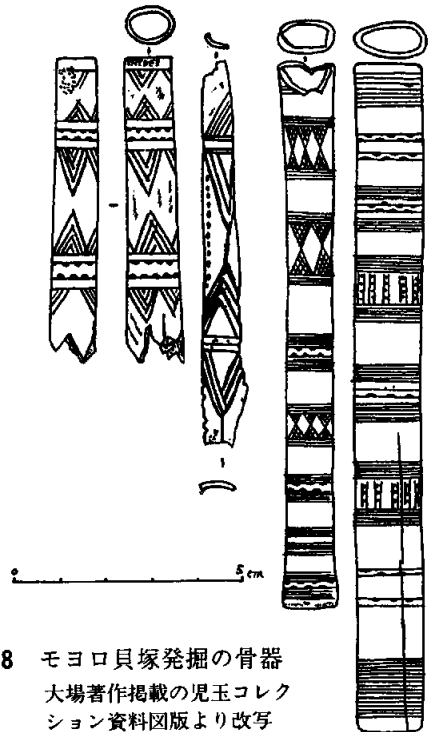


図18 モヨロ貝塚発掘の骨器
 大場著作掲載の児玉コレクション資料図版より改写

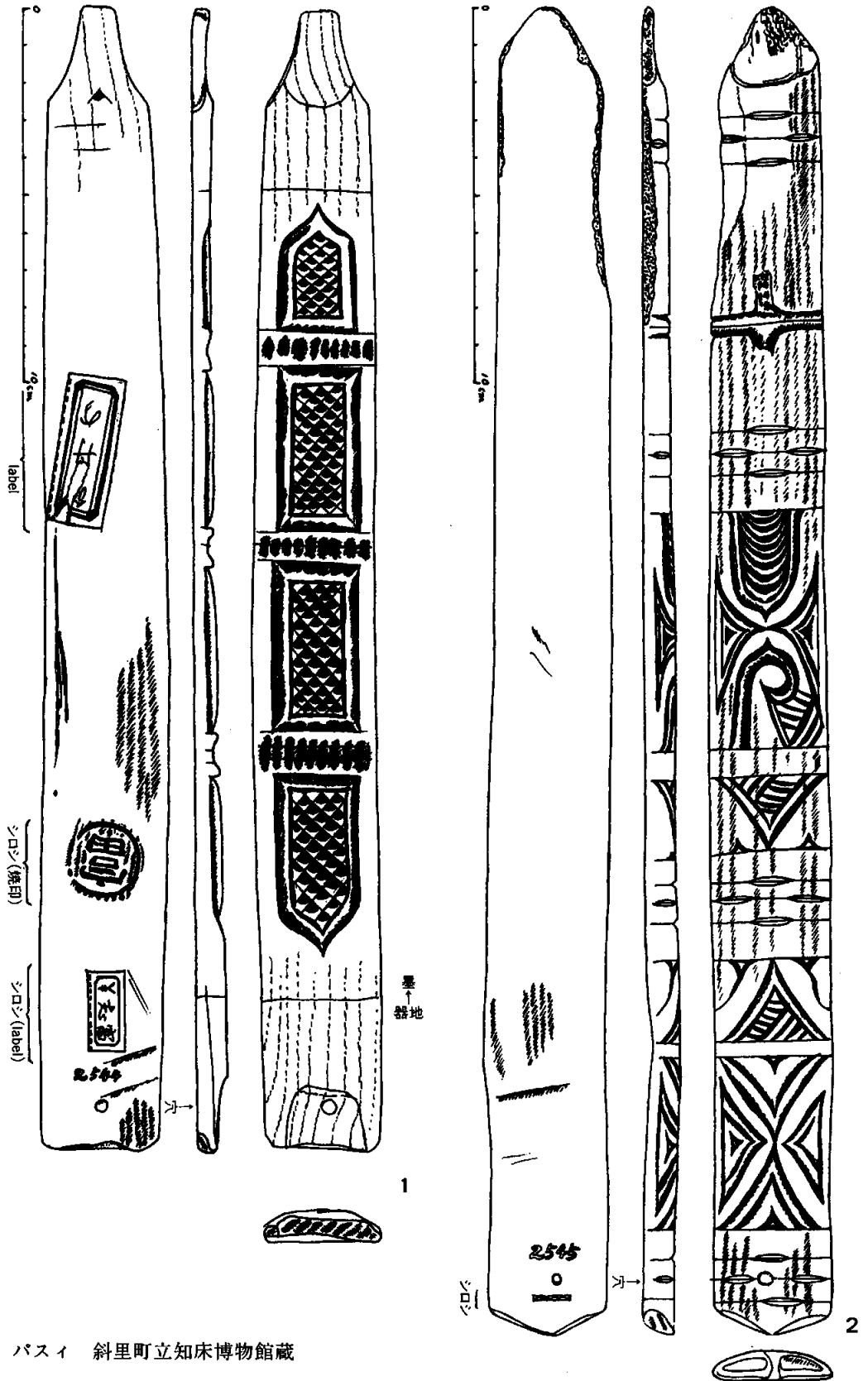


図19 バスイ 斜里町立知床博物館蔵

まとめ・紋様及びバスイトクパの起源試解

小稿で実測図化したバスイの刻紋を総括しよう。刻紋の最小単位や、それらが組み合わせられた刻紋群の意匠は、東アジア列島北辺の複数人間集団と、その個々の文化の相互交流によって創造された事が明らかになった。とりわけ、バスイが「箸」に由来する呼称であるという説に依拠した場合は、和人文化との関わりは看過できない。和人文化古代末から中世にかけての刀剣鞘意匠が、バスイ意匠決定に果たした影響については別稿『バスイ集成・基礎分類篇』1994でふれておいた。併せて、漆器嗜好についても、和人文化とアイヌ文化の交流史上注目すべきものと思われるのである。

他方、資料10の『杏仁紋』とそれらを繋ぐ刻線は、モヨロ貝塚発掘オホーツク文化鳥骨製針容器の刻紋と、対応関係が確認できる事に注目できる(図20)。時に基線から立ち上がる山形刻紋は、オホーツク期やそれに先だつ続縄文期骨角器に出現し、エンチウの現存イクニシまで継続しているものである。骨器上のこの種刻紋は図10のような過程を推定する事で、波立てて泳ぐ海洋神と解釈できるのではあるまいか。

多種の意匠で構成されるバスイ群であるが、その中に器面を並行切線で区画化する意匠の創意は、オホーツク文化骨器の『擬縷糸締め付け帯』の継承と思われる。紐や糸によって器物の損壊を防ぐ、とりもなおさず靈力に期待する意図で施紋された伝統意匠によるのだった(注21)。とりわけ図21に示す種類は、貴重な鉄針を保護する容器への施紋例として、評価しておきたい。私は、その構成要素たる『半切舟窩紋』が、バスイ両端を横断する平行切線上に規則的に連続配置されるバスイトクパと酷似する事実を指摘したい。彫刻主体者の男系を象徴すると説かれてきたバスイトクパであるが、祖先との関わりを表明する今一つの木製品である墓標の頭柱に、特殊な結縄を施す慣習を想起するならば、両者の関連は看過すべきではない。重要な器物に紐や縄を巻き結束する事に、自己の存在と信仰を繋ぐ identity を確認する行為ではなかったか。更にはバスイを木製とする事で、イトクパは『擬桜樹皮帯』も許容されるようになった事にも注目しておきたい(図22)。

ここに、バスイトクパとは何であったのか、その歴史的な起源が明らかになったと考える。

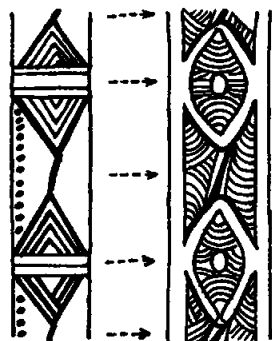


図20 微小骨器とバスイの刻紋対応例

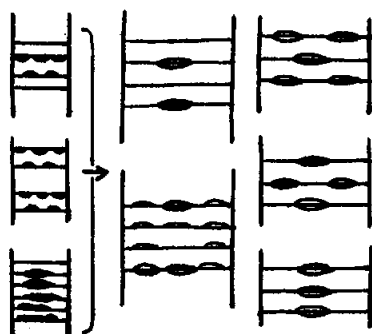


図21 類『擬縷糸締め付け帯』とバスイトクパ

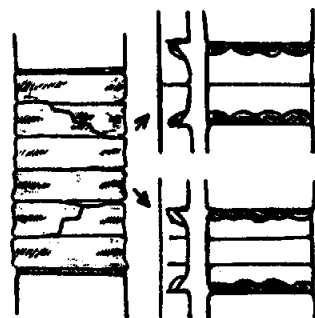


図22 カリバ巻の彫刻紋様化

註

1. 出利葉浩司『アイヌの紡鐘車について』開拓記念館研究年報第13号, 1991, 同館, 以降の出利葉氏による複数の論文が重要である。
2. 金盛典夫編『所蔵目録-3(民族資料篇)』1983, 斜里町立知床博物館, 総資料446である。
3. J. パチュラー「アイヌ人と其説話」1925富貴堂 金田一京助『アイヌのイトクパの問題』1930 河野広道『アイヌのキケウシバシユ』1933 杉山壽榮男『北の工芸~付ヒゲベラ』1934 米村喜男衛『北見アイヌ人』1937北見郷土研. 名取武光『削著・祖印・祖系・祖元及び主神

- 祈より見たる沙流川筋のアイヌ』1940
 F. マライーニ 『Gli ikbashui degli Ainu』
 1942伊太利日本大使館
 馬場脩 『Iku-Nishi of the Saghaline Ainu』
 1949 London
 米村喜男衛・知理真志保『アイヌ土俗品解説』,
 網走市史上巻, 1952網走市役所
 山本祐弘・知里真志保『樺太アイヌ・住居と
 民具』1970相模書房
 田中美代子『資料案内シリーズ・ひげべら』
 1970天理大学付属天理参考館
 藤村久和・他編『民族調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』
 1973・73・74北海道開拓記念館
 馬場脩・姫野英夫『カラフトアイヌのひげべ
 ら』1974, 『北海道アイヌのひげべら』1976市
 立函館博物館
 河野本道『市立旭川郷土博物館所蔵品目録Ⅵ』
 1978同館
 萱野茂『アイヌの民具』1978同出版協力会
 名取武光『アイヌの花矢と有翼酒箸』1985六
 興出版
 萱野茂『バスイは生き物』1990北海道ウクリ協会
4. 既出米村・知里による。同一機能民具の方言
 的性格の異同を示すと共に、歴史的変化の差異
 も興味深い。服部四郎編『アイヌ語方言辞典』
 1964岩波書店を参照されたい。
 5. 既出藤村編書Ⅲによる。美幌地域アイヌ文化
 伝統によると思われる各種バスイ分類を、写真
 でも示しており重要である。同書P.50の「カム
 イバスイ」資料につき、戸部千春『河野コレク
 ションに見る美幌のカムイバスイ』1990がある。
 6. 既出馬場及び姫野共著の inau-itokpa による。
 7. チセ内宝壇に積まれた漆器群が、所有者を加
 護するという思惟が、口承文芸に語られている。
 8. 『北海道開拓記念館だより Vol. 17. NO. 3』
 1987掲載写真解説「(略) アイヌのくびとは漆
 塗りの技術をもたなかったようであることから
 考えれば、このように漆が塗られた捧酒籠は、
 例外的でめずらしいものである。」による。10
 本中1点には『海洋上空神と海洋神の複合意匠』
 がある。伝統の古型式を保持したものと考えた
 い。「類バスイ漆器」も2点掲載されている。
 9. そうした近代末或いは現代初頭製作例として
 大塚和義編『アイヌモシリ・民族文様から見た
 アイヌの世界』1993国立民族学博物館, P.88掲
 載の89. 90番資料を指摘しておく。私は90番と
 同一意匠品所蔵。複数の製作があったと判る。
 10. 既出河野広道論文による。
 11. 既出名取著書1985による。
 12. 河野広道『アイヌとトーテム的遺風』民族学
 研究2-1, 1936, 及び既出馬場・姫野共著。
 13. 既出馬場論文の掲載図。これは姫野との共著
 にも再録されている。小稿に図9として引用。
 14. 既出名取著書1985. 同書籍掲載のケケウシバ
 スイにはこの刻紋がある。浜益の資料であろう。
 河野本道編書1978に載る178番資料にも「浜益,
 山下三五郎作、裏面 ♡ カピウ(かもめ)のシロ
 シあり」と、解説されている。
 15. 河野広道『墓標の型式より見たるアイヌの諸
 系統』蝦夷往来第4号, 1931, 墓標を含む葬送
 については、原田喜世子『アイヌの葬送習俗(北
 海道の研究7)』1985清文堂がある。
 歴史的な地域集団の考察に就ては、山田秀三
 『アイヌ語地名分布の研究』著作集1, 1982,
 草風館、があるが、東北と北海道を対象とする。
 16. 秋葉実解説『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌
 /中』1985北海道出版企画センター。P.198参照。
 17. J. バチラー『アイヌ語より見たる日本地名
 研究』(改訂版) 1935バチラー学園。P.57
 18. 既出藤村・他編書Ⅲによる。
 19. 既出萱野著書1978, P.149, 178による。
 20. A. マジェヴィッツ編『Bronislaw Piłsudski
 /Ainu Prayer Texts I・II・III』1984~85
 アダム・ミツキエヴィチ大学言語学研究所,
 このテキスト原稿のポーランド語原稿を再解説
 し、新たな英文翻訳を付した次の発表がある。
 和田完・J. バインチェロフスキ「B. Piłsud
 ski の草稿『アイヌの祈り—付英文翻訳』北
 方文化研究第20号, 1989北海道大学文学部付属
 北方文化研究施設
 21. 河野広道『縄模様の変遷』歴史家創刊号, 1953.
 この観点で彫刻紋様を考察した稿として
 戸部千春『東アジア列島北辺の直状小刀鞘(ト
 カブチ第7号)』1993帯広市春陽堂書店、『斜里
 のアイヌ民族マキリ鞘』知床博物館研究報告第
 14集, 1993同館。『マキリ文様からみた文化』
 第1回環オホーツク海文化のつどい, 1993紋別
 市立図書館事業実行委員会、等を参照。

参考文献（既出註欄文献も一部含む）及び補註

一色八郎『箸の文化史』1990/改訂版1993, お茶の水書房

内田武志・宮本常一編訳「えみしのへさき」他菅江真澄遊覧記2, 1966, 平凡社

大塚和義・編『アイヌモシリ 民族紋様から見たアイヌの世界』1993, 国立民族学博物館

大場利夫『モヨロ貝塚出土の骨角器』北方文化研究報告第10輯, 1955, 北海道大学

萱野茂『アイヌの民具』1978, すずさわ書房

萱野茂『トゥキパスィ』北海道大百科事典下, 1981, 北海道新聞社

萱野茂氏が父貝沢清太郎氏から継承した呼称である「トゥキパスィ」によって、項目名とされている。しかしこの呼称は同エカシ独自の呼称であり、一搬的名称と解す事は困難ではあるまいか。むしろ何故そう呼んだのか究明すべきと考えたい。私はパスィと一括使用されるトゥキ(杯)に注目したい。和製漆器であるそれは、美と霊力の象徴としてアイヌ文化伝統の思惟に位置付けられていたが、アイヌ民族自製品のパスィにもその性質、即ち漆器性質を希求した事の反映ではなかったか。小稿で述べてきたように、男性が主宰するカムイノミの祭器の中で、唯一漆器ではなかったパスィも、近代末に至り、トゥキと同じような「類パスィ漆器」までも受容するようになっていた事と関連すると考える。萱野茂『パスィは生き物』1990, 北海道ウタリ協会

金田一京助『アイヌのイトクバの問題』1930/著作集第12巻1993, 三省堂書店

河野広道『墓標の型式より見たるアイヌの諸系統』蝦夷往来4号, 1931.

河野広道『アイヌのケケウシバシュイ』人類学雑誌48-7, 1933.

河野広道『アイヌとトーテムの遺風』民族学研究2-1, 1936.

河野広道『縄模様の変遷』歴史家創刊号, 1953

河野本道『市立旭川郷土博物館所蔵品目録VI』1978, 市立旭川郷土博物館

杉山壽榮男『北の工芸一付ヒゲベラ』1934/1970, 北海道出版企画センター

杉山壽榮男『アイヌ文様』1926/1974, 北海道出版企画センター

杉山壽榮男『アイヌ芸術・木工篇』1942/1973, 北海道出版企画センター

杉山壽榮男『アイヌ芸術・金工・漆器篇』1943/1973, 北海道出版企画センター

田中美代子『資料案内シリーズ・ひげべら』1970, 天理大学付属天理参考館

戸部千春『河野コレクションに見る美幌のカムイパスィ』1990, 研究会いたやかえで

戸部千春『東アジア列島北辺の直状小刀鞘』トカブチ第7号, 1993, 帯広市静窓書房

戸部千春『斜里のアイヌ民族マキリ鞘』斜里町立知床博物館研究報告第14集, 1993, 同館

戸部千春『パスィ集成・基礎分類篇』紋別市立博物館研究報告第7号, 1994, 同館

名取武光『削箸・祖印・祖系及び主神祈り見たる沙流川筋のアイヌ』人類学雑誌55-5, 1940

名取武光『アイヌの花矢と有翼酒箸』1985, 六興出版

バチェラー, J.『アイヌ人と其説話』1925, 札幌・富貴堂

バチェラー, J.『アイヌ語より見たる日本地名研究』(改訂版)1935, バチェラー学園

馬場脩『Iku-Nisi of the Saghaline Ainu』1949,

馬場脩・姫野英男『カラフトアイヌのひげべら』1974, 市立函館博物館

馬場脩・姫野英男『北海道アイヌのひげべら』1976, 市立函館博物館

藤村久和・他編『民族調査報告書I・II・III・総集編』1973~75, 北海道開拓記念館

藤村久和『神々の物語(4)(5)』北海学園大学学園論集第55号, 1986, 北海学園大学

マジェヴィッツ, A.編『Bronislaw Piłsudski / Ainu Prayer Texts I・II・III』1984~85, ア

ダム・ミツケヴィチ大学言語学研究所

マライーニ, F.『Gli ikubashui degli Ainu』1942, 伊太利日本大使館

山本祐弘・知理真志保『樺太アイヌ・住居と民具』1970, 相模書房

米村喜男衛『北見アイヌ人』1937, 北見郷土研究会

米村喜男衛・編『モヨロ貝塚資料集』1950, 野村書店

米村喜男衛・知理真志保『アイヌ土俗品解説(網走市史上巻)』1952, 網走市役所